



ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part IB

Japanese Studies

Monday 11 June 2012 9.00 – 12.00

J.5 MODERN JAPANESE TEXTS, 2

Answer BOTH sections

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.

SECTION A

- 1 Translate the following passage from an unseen text into English. [40 marks]

さて、いつから英国人は、このようにモラルを失した国民になり下がったのだろうか。それはサッチャーポーク政権になつてからであり、教育の問題に帰着する。これは私の意見だが、聞いてみると、多くの英國人も私のこの意見に相槌を打つてくれる。

サッチャーポークは落ちぶれてゆく英國経済を食い止めようと、同時に彼女個人の名声のために、國家予算を産業や金融のほうへ注ぎ込んだ。それはあくまで、産業の上に立つ者、ビジネスの上に立つ者を助けるためであつて、彼女にとって、労働者階級なんか眼中になかった。もちろん、現在もない、と私は見ている。

産業を立て直すこと、ビジネスを円滑に回転させること、それが国家を強くすることだと信じているのだ。しかし、彼女は産業と金融に援助をしても、教育費は削減してしまつた。

公立の学校への予算を削り、英國の未来を担うことになる子どもたちの夢をちよん切つてしまつたのだ。そのかわり、軍隊へ志願した男女の子女には、無料でバブリックスクールやボーディングスクール（寄宿制学校）の教育を受けられるという特権を与えた。軍隊に行きたくない労働者階級の家庭の子どもは、無料の公立校へ行くことになるが、そこでは、まったく教育らしい教育が受けられない。

私の友人の三千代さんといふ女性が、私より三年遅れて、このロンドンで英國人の男性と結婚した。二年後に子どもが生まれて、親子三人で東京へ帰つたのだけれど、子どもが小学校へ入学する年になり、東京のインターナショナルスクールは、当時の彼女の主人の収入ではむづかしかつたので、授業料が無料の英國の公立校へ入学させるため、ロンドンへ戻ってきた。

私が彼女の家族とここで再会したのは一九八四年の四月。そのとき、彼女には二人の男の子がいた。上の男の子が十歳で、下の子は六歳だったという。三千代さんは私にこういった。

TAKAO KEIKO, *Igirisujin wa okashii* (2001), pp. 206-7.

相槌を打つ	express agreement	削減	cut back on
金融	finance	担う	bear the responsibility for
円滑	smooth	三千代	Michiyo

SECTION B

Translate **two** of the following passages from seen texts into English. [30 marks each]

2

飯がすむと、棒頭が皆を空地に呼んだ。

まだだ！

「俺ア行きたくねえや……」 みんなそう言った。

空地へ行くと、親分や棒頭たちがいた。源吉は縛られたまま、空地の中央に打ちぶせになっていた。親分は犬の背をなでながら、何か大声で話していた。

「集まつたか？」 大将がきいた。

「全部だなあ？」 そう棒頭が皆に言うと、

「全部です」と、大将に答えた。

「よオし、初めるぞ。さあみんな見てろ、どんなことになるか！」

親分は浴衣の裾をまくり上げると源吉を蹴った。「立て！」

逃亡者はヨロヨロに立ち上った。

「立てるか、ウム？」 そう言って、いきなり横ッ面を拳^{こぶし}固^{まも}でなぐりつけた。逃亡者はまるで芝居の型そっくりにフラフラッとした。頭がガックリ前にさがつた。そして唾^{つば}をはいた。血が口から流れてきた。彼は二、三度血の唾をはいた。

「ばか、見ろいッ！」

親分の胸がハダけて、胸毛がでた。それから棒頭に

「やるんだぜ！」 と合図^{あいざ}をした。

一人が逃亡者のロープを解いてやった。すると棒頭がその大人の背ほどもある土佐犬を源吉の方へむけた。犬はグウグウと腹の方でうなっていたが、四肢^{しし}が見ているうちに、力がこもってゆくのが分った。

「そらッ！」 と言った。

棒頭が土佐犬を離した。

犬は歯をむきだして、前足をのばすと、尻^{しり}の方を高くあげて……源吉は身体をふるわしていたが、ハッとして立ちすくんでしまった。瞬間シーンとなつた。誰の息づかいも聞えない。

土佐犬はウォッと叫ぶと飛びあがつた。源吉は何やら叫ぶと手を振った。

盲目^{めくじら}が前に手を出してまさぐるような恰好^{あわせ}をした。犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあって、二、三回土の上をのたうつた。犬が離れた。口のまわりに血がついていた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三回まわつた。源吉は倒れたままちょっとの間ピクッピクッと動いていた。がフラフラと立ち上つた。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。源吉はひとたまりもなくはね飛ばされて、空地を区切っている塀に投

question continues....
(TURN OVER)

げつけられた。犬はまたせまったく！ 源吉は犬の方に向きなおった。そして
塀に背をもたせ、背中でずつて立ち上った。皆んな思わずその方を見た。こ
っちは向かた顔はすっかり血だらけで分らなかつた。その血が頸から咽喉を
伝つて、すっかりムキだしにされて、せわしくあえいでいる胸を流れるのが
分かつた。立ち上ると源吉は腕で顔をぬぐつた、犬の方を見定めようとする
ようだつた。犬は勝ち誇つたように一吠え吠えると、瞬間、源吉は分けの分
らないことを口早に言ったか、と思うと、
「怖かない！ オッ母ッ！」と叫んだ。

KOBAYASHI TAKIJI, ‘Hito o korosu inu’, in *Kobayashi Takiji shū* (1992) pp. 188-189

3

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭どい貝であった。土をすぐうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れだ。そして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちている間に、角が取れて滑かになつたんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は苔の上に坐つた。これから百年の間こうして待つてゐるんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと上つて來た。そして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ來ない。しまいには、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなかろうかと思い出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて來た。見る間に長くなつてちょうど自分の胸のあたりまで來て留まつた。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薺が、ふくらと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂つた。そこへ遙の上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一つ瞬いていた。

「百年はもう來ていたんだな」とこの時初めて気がついた。

NATSUME SŌSEKI, ‘Yume jūya’, in *Natsume Soseki shū*, Aozora bunko online edition.

(TURN OVER)

4

「僕も女と一緒に暮らしていたけどね」
 「なぜ過去形なんだ」

「女と言ってもまだ十七の少女だった。例の、引き揚げの時拾って連れて帰った、というより僕についてきた中国人らしい女の子だ」

「知ってるよ。汚れを落としてみると大変な美少女だったな」

「だんだん大きくなつたんだ」

「それは当たり前だ。やがて君は紫の上に手を出した源氏の境地に達したというわけか」

私は相手が尋常ではないことをつい忘れて軽口を叩いたが、相手は別にきっとなるでもなく、にこにこ笑っている。それが何とも悲しそうな目をしてにこにこと小春日和みたいに笑っている。

「僕らは夫婦にはなれなかつたんだよ。麗は法律上は僕の娘ということになつていたからね。それでもある夜、僕は麗の部屋へ忍んで行った。どういうわけか、小さい頃から一人で寝たがる子でね。いつも寝る時は別々だった。さぞ可愛い寝顔をして眠つているだろう。そう思うともうとても堪らない。寝顔を見るだけだからと自分に言いきかせて、覗いてみると寝顔がない」

「寝顔がない？」

「首がないんだ。これは殺人事件だと、とっさに思つて血が下がつた。だがそれにしては血が流れていない。おまけに首のない胴はまだ生きているらしくて、ほどよくふくらんだ胸が上下している。首がなくてどこで呼吸しているのかわからないが、胸の谷間にはうつすらと汗が光つている。しかし首はない」

「飛頭蛮だな」

「余り驚かないようだね」

「いや、驚いている」

そろそろ「病氣」の核心に触れてきたと思ったので、私はいろんな意味で病人を刺激しないように用心した。

「僕は驚いたね。頭も混乱した。しかし同時によからぬ気持ちが蠢動しはじめるのがわかって頭の中が熱くなった。首のない麗は意識も思考もなしに生きている。その手に触つてみると温くて柔らかい。握りしめているうちに少し汗ばんでくる。布団の下の脚は軽く開き加減に投げ出されているらしい。麗の脚は日本人の脚と違つて、よく伸びていい形をしている。その先には象牙細工のような、華奢で端正な足がついている。

KURAHASHI YUMIKO, 'Kubi no Onna', in *Kurahashi Yumiko shū*, pp. 33-35

END OF PAPER